



フィリピン名物サン・ミゲルビール。スーパーでは90円、お店では200円程度から飲むことができる（筆者撮影）

目立つ中華系財閥

歴史・規模を誇るフィリピン

フィリピン経済を語る上で欠かせないのが、この国の財閥の存在である。当地フィリピン系財閥に加え、中華系やスペイン系など、いずれも創業の歴史は違えど、今やインフラ、金融、サービスと多方面に触手を伸ばすコングロマリット（複合企業体）に成長し、フィリピン経済を牛耳る存在となっている。

歴史・規模を誇るフィリピン

の財閥の中でも特筆すべきは、新興財閥といわれる中華系財閥の存在である。

今年故人となったが、2018年に米国フォーブス誌の世界長者番付の第52位（純資産額200億ドル）にランク入りしたヘンリー・シー氏が創始したSMグループの事業の嚆矢は、シー氏が1958年に始めた小さな靴の卸問屋（Shoe Mart）だった。

地場銀行最大のBDOユニ

バンクを有し、最近では拡大する個人消費をうまく取り込み、ユニクロを運営するファーストリテイリングと提携するなど事業を急成長させてきた。

フィリピン最大の食品・食料会社を有するJGサミット・グループのゴンコンウェイ氏も華僑系だ。

いずれもあまり裕福ではない中国の農村部出身の家柄で、アジアのフロ

ンティアを求めてフィリピンに移り住んできた出自を持つ。まさにフィリピン・ドリームを体現してきた財閥たちである。

先駆者はスペイン系

フィリピン・ドリームの先駆者であるスペイン系財閥の歴史は古い。

スペイン・バスク地方出身とするアヤラ一族は、18世紀ごろからプランテーションによるアグリビジネスで繁栄を極め、第2次世界大戦後、荒廃したマニラ市街地の再開発に尽力した財閥だ。近年では日本の三菱と組んで不動産開発などを手掛け、マニラの「ウォールストリート」と呼ばれる中心地マカティの大地主として、不動産業のみならず電力や交通インフラ事業にも参入し、マニラ振興の主要プレーヤーとなっている。

「サン・ミゲルビール」をはじめとする、飲料事業で財を成したサン・ミゲル財閥は、日本の麒麟との酒類事業における

資本提携でも有名だが、近年積極的な企業の合併・買収（M&A）や資源権益産業への進出など事業の多角化を進め、売上高2兆円を突破するグループへと成長を遂げている。

新たな動きも

このように、フィリピンの経済成長を支える財閥は、さまざまな業種・業態をグループ傘下に抱えることでその強みを発揮してきたが、近年では、BPO（Business Process Outsourcing）など、既存の組織や産業の枠を超えた、技術と人材、データと現場の新たなマッチングを通じたオープンイノベーションにビジネスチャンスを見いださんとする動きがあり、ベンチャー企業を発掘するプラットフォームなどの動きも活発だ。次なるフィリピン・ドリームをつかむのは誰か。

（国際協力銀行

マニラ駐在員事務所 駐在員

宮原 綾子